

第六章 王の生活

朝、トムはウェストミンスター宮殿の大きくて美しいベッドで目を覚ましました。

目を開けると、トムはベッドの脇に二人の従者を見ました。

「陛下」と一人目の従者が言いました。

「8時です、陛下」と二人目の従者が言いました。

「何だって？」とトムは言いました。

「陛下は起き上がることをお望みですか？」と一人目の従者が尋ねました。

「あなたが言っているのはつまり、『俺が起きたいか』ってということですか？」

「はい、陛下」

「うん、そうですね」とトムは言いました。

「俺の服はどこですか？」

一人の従者がトムの下着を部屋に持って来て二人目の従者に渡し、二人目の従者は下着を三人目の従者に渡して、三人目の従者はトムが下着に着替えるのを手伝いました。

このようにして、従者たちはトムに高価な服を着せました。

一時間後、トムは準備ができました。

トムは朝食を取りに、別の美しい部屋へ行きました。

一人の召使いが食べ物を部屋に運んで来ました。

その召使いは食べ物を二人目の召使いに渡しました。

二人目の召使いは食べ物を三人目の召使いに渡して、三人目の召使いは食べ物を食卓の上に置きました。

四人目の召使いは、トムの皿に食べ物をいくらか載せました。

他の二人の召使いたちはトムの椅子の後ろに立ったまま、何もしてませんでした。

召使いたちはトムのためにあらゆることをしました！

朝食後、一人の召使いが「陛下、ハートフォード卿が陛下とお話しになりたいそうです」と言いました。

ハートフォード卿は中に入ってきて、お辞儀をしました。

「陛下、ご準備はよろしいですか？ 家臣たちが会議の間で待っております」

トムは会議の間へ行き、王の金の椅子に腰掛けました。

家臣たちがやって来てお辞儀をし、トムの手に口づけをして、長い数枚の紙を読み上げました。

それはとても退屈で、何時間も続きました。

一人の家臣がお金について話をしました。

「お金がないのです、陛下、なぜならヘンリー王がお金を全部使ってしまったからです。王はお城をたくさん造り、高価な服や宝石を身に着けました。それに王の葬儀にもお金がたくさんかかったのです！陛下には千人の召使いがいますが、彼らにお金を支払わなければなりません」

トムはその家臣を見て、「俺たちはたった十人の召使いたちだけで、小さな家で暮らせばいいんです。プディングレーンのそばの街に、一軒のすてきな家があるんだけど…」と言いました。

ハートフォード卿がトムの腕を優しく取ると、トムは話すことを止めました。

トムの顔は赤くなりました。

「ああ、これはいつ終わるのだろう？」とトムは思いました。

「ボール遊びをしたり、川で泳ぎたいなあ」

トムは大きな食堂で昼食を取り、食べ物は美味でした。

しかし、トムは自分の友達や川での遊びについて考えることを止められませんでした。

昼食後、トムはエドワード王子の部屋へ戻り、皆を追い払いました。

数分後、一人の少年が静かに入って来ました。

「君は誰？」とトムは尋ねました。

「ああ、陛下は本当にご病気なのですね」と少年は言いました。

「僕はハンフリー・マーロウです。あなたの身代わりの少年です」

「俺の身代わりの少年だって？」とトムは叫びました。

「はい、陛下」と少年は言いました。

「陛下がギリシア語の授業の間に間違いをなさると、陛下の先生はお怒りになられます。しかし、誰もウェールズ公をぶつことができません、だから先生は僕をぶつのです。それが僕の仕事です。しかし今や陛下は国王ですから、おそらくギリシア語をもう勉強なさらないでしょう。そうすると僕は自分の職を失い、僕の家族は飢えてしまうでしょう。僕たちは路上で暮らすことになるでしょう...」

「何だって？」

トムは少年を見つめ、大きな声で笑いました。

「いいかい、ハンフリー、俺は自分の勉強を止めないし、これからもたくさん間違いをするだろう。彼らは君にこれまで以上にお金を払うだろう、そして君は生涯ずっと働けるというわけだ」

「ああ、ありがとうございます、陛下。あなたはとてもお優しい」

トムはハンフリーと話をするのが好きで、エドワードの生活について多くのことを学びました。

ハートフォード卿がトムを迎えにやって来て、トムを会議の間へと連れ戻しました。

「ご気分が良くなりましたのですね、陛下、私にはそれが分かります。陛下はもっと多くのことを覚えていきます」とハートフォード卿は言いました。

「陛下は国璽がどこにあるか覚えていらっしゃいますか？」

「国璽？」とトムは尋ねました。

「それはどのようなものですか？」

「何ということだ」とハートフォード卿は思いました。

「王様はまだ具合がよくないのだ」

彼らが会議の間に着くと、トムは午後の間ずっと、たくさんの書類にエドワードの名前を署名しなくてはなりませんでした。

王の仕事は楽ではありませんでした。

それは長くて退屈な午後でした。

その晩に、また別の素晴らしい食事がありました。

そしてその後、トムはようやくベッドに入りました。

「俺の服は美しく、宮殿は申し分ない」とトムは思いました。

「食べ物はおいしく、今では俺は飢えることもないけれど、国王にはなりたくない。毎日が同じことの繰り返しだ。プディングレーンの方がもっと楽しい」